
~特別編~ある家族とゆかいな狐と

サイレンス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「特別編」ある家族とゆかいな狐と

【Zコード】

Z6404B

【作者名】 サイレンス

【あらすじ】

三年前のある春の日。暇人していた零と家事で忙しいナオキはある不思議な出会いをする……この作品は宮座頭数騎様との共同作品です~

(前書き)

この作品を投稿するに当たって…宮座頭数騎様のご協力と善意によつてこの「ハボ作品」が生まれました。前書きに変わりここに感謝いたします。

春麗…まだ、ムサシ達が中学一年生の頃、簡単に言えば二年前のあ
る春の日の出来事がありました。

春の陽気に誘われて、いつもより口当たりの良い居間に寝転が
る銀髪の女性、武藏たけくら零は大きな欠伸をしながら、すぐそこの方所で
食器を洗う…零曰く、史上最強の家政夫であるナオキの名前を呼ん
だ。

「ナオキー！私、甘いものが食べたい」

「戸棚の奥に角砂糖があるぞ」

「嫌よ、この前、角砂糖舐めたけどおいしくないんだもん」

「…実行済みだつたか」

洗物を終えたナオキは濡れた手をタオルで拭きながらやる気なさそ
うに寝転がる零を見る。

「とりあえずだな…俺の条件を一つ叶えたら昨日作ったイチゴタル
トをおやつに出してやろう」

「一つの条件？あまりハードなものは嫌よ」

「何、簡単だ。まず一つ、玄関先に置いてある洗濯物を干してきて
ほしい。そして一つ目…とりあえず服を着ろ」

昼間から下着で寝転がる零を見下げたナオキはため息を吐くしかな
かつた。これでも伝統ある武蔵家の当主だというのに…

「え…と…まずは洗濯物干してから服着ればいいのね」

「無理にとは言わないが…出来れば順序を逆にしや。明日の三面記
事に『下着姿の女性、人目はばからずに洗濯干し』なんぞというも
のに載りたくないだろ？」

「…そういうリアルで生々しい事を言わないでよ。私はいつまでも
うら若い乙女でいたいのよ」

「とりあえず乙女はそんな下着姿で昼間つから居間で寝転がつちゃ

「いよいよ」

「…それもそうね。とりあえず洗濯物干していくわ」「だ・か・ら！服を着るといつのにつー！」

「あ〜、すっかり忘れてたわ」

平然と一番重要な点を忘れ、アハハと笑う武蔵家当主。そして、呆れる事を通り過ぎ、沸々と怒りが沸いてくるのを覚える家政夫であった。

「洗濯物といつてもねえ…」

ようやく『服を着る』という大人としての第一関門を突破した零は、青いプラスチック製のカゴに入っている洗濯物の山を見た。

「半分近くは私の服なのよねえ…」

零はボヤキながら、よいしょとカゴを持ち上げた。四人分の服とはいえ、ある人物のおかげで普通の家庭の洗濯物の2倍の重量のある洗濯カゴを持ち上げるには苦労がいる。

「うう…か弱い乙女には重過ぎるわ…」

そんな独り言を呟きながら、零はようようと十メーターブラウス離れた物干し竿がある場所へと歩いてゆく。

目の前の障害物など知らずに。

ドンッガジャシャー——シャン——

「ん…ベタな効果音だな」

イチゴタルトを冷蔵庫から出していたナオキは外の騒音に思わず手を止めた。たかが洗濯物を干すことにして、なぜあんな音が出るのだろうか。

「な、な、ナオキいー！」

「どうした零？そんな見ちゃいけないものを見てしまったけどそれがとても可愛かった…みたいな顔をして」

「外に…耳の生えた変な生き物踏んじゃつた…」

「…新手の『萌』か?」

「ホントよー! 尻尾も生えてた!」

「…ネコミミか?」

「ちょっと違つよつな…もうちよつと茶色い…」

「あ、イヌミミか」

「まだ遠いわ…とりあえず外に見に来てよーまだ転がつてゐからー…」

「…死体遺棄だな」

「つるさこつ…!」

取り乱す零に、やれやれ…とナオキは重い腰を上げた。今の世の中、ネコミミ付けたコスプレイヤーなぞいてもおかしくない。ただ、こんな田舎までコスプレイヤーがわざわざ来るだらうか?

「どれどれ、ネコミミ付けたコスプレイヤーは…っと」

外履きのサンダルに履き変えながら、ナオキは一足先に飛び出した零の後を追う。

「ほりつ! 耳と尻尾が生えてるじゃない!」

零は玄関と物干し竿の間にぐつたりと倒れている耳と尻尾付きの子供…だらうか、小さな人…すらも怪しいが、倒れていた。

「お~、確かにコスプレイヤーだな」

「冗談言つてる場合じやないわよッ! ちゃんとここから耳が生えてるじゃないの!」

「お~、最近のコスプレ技術は凄いもんだなあ」

「…ナオキ、ぶん殴るわよ」

冗談だよ、とナオキは、拳を今にも振りかざしそうな零に苦笑いを返す。

「とりあえず、耳と尻尾付きのこの子を空いてる和室に運ぼう。話はそれからだ」

「まだ生きてるの?」の子?」

「死んでたら一大事だよ。下手すりや戦争もんだ」

ナオキはその子をひょい、と抱え上げると、慌てふためる零と共に

武蔵家へと踵を返した。

「……あれ、こにはどうですか？」

「ん…目が覚めたかな？」

数時間後、ようやく目を覚ましたコスプレっ子に気が付き、ナオキは読んでいた洋書を閉じた。

「オイラは一体…」

「それはこちらが聞きたいね。とにかく、その耳と尻尾は本物かい？」

ナオキは時折、大きな耳を動かす子供に笑い掛けた。

「…なんて。いや、しかし参ったな。まさかこんな所に狐が現われるとはな」

「…オイラの正体に気付いたんすつか」

「ハハッ、かく言つ俺も正確にはヒト科の人間類ではないんでね。

寿命が長いのはお互い様さ、玉藻烈狐丸クン」

ナオキが、そういうと、『玉藻烈狐丸』と呼ばれた小さな狐は少し驚いた表情を見せた。

「オイラ、そんなに有名だつたんすね」

「まあね。しかし何故、こんな所に。ましてや、何故ウチの零に踏まれるなんて」

「いや、それはオイラだつて避けようとはしたつすよ…」

「全く、済まない事をした。…起き上がるかい？」

「大丈夫っす」

ぴょん、と布団の中から烈狐丸は飛び上がった。

「零、よかつたな、大丈夫だつてよ」

「…『めんなさい』

一部始終を襖の隙間から申し訳なそうに見ていた零は烈狐丸と目が会うと、頭を下げた。

「いや、いいですよ！そんなに謝らなくてもツーピックリしただけつすからー！」

「ホント…『めんなさい』だから…戦争だけは勘弁してください！」

妖怪大戦争だけはツ！」

「あの…この子は何を言っているんすか？」

「…氣にするな、武蔵の人間つてはみんなそんなもんだ」

必死に謝り続ける零にナオキは苦笑いを烈狐丸に見せた。

「とりあえず…俺はナオキだ。そしてそこで今だに謝り続けるのが
武蔵零」
たけくら

「オイラは玉藻烈狐丸つす！よろしくつす！」

「…『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』
れ…」

「…零、そうお絆みたいな『めんなさい』を呟えるのは止めてくれ。
なんだか非常に怖いから」

「だつて…『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』…」

「確かに…烈狐丸は『善狐』の最上位の『天狐』であつてとてーー
も偉い訳だが、本人ももう謝らなくてもいいと言つてているわけだし

…」

「そつすよーもつ顔を上げてくださいっすー」

「…じゃあ…お言葉に甘えて」

と、零はごめんなさい経を止め、ようやく顔を上げた。

「で…烈狐丸クン。君は何故こんな人里…しかもこんな田舎に来た
んだい？まさか自然が恋しくなつたといつのは無しだよ」

「それは…多分、力に引かれたんだと思つっす」

と、烈狐丸はナオキを見上げる。

「力？…確かに強大な力があるものはもう一方の力に引かれやすい
とはいが…」

「…気付いたらいにいたつすよ。どうやつてきたとかは憶えが無
いっす…」

「ふむ…もしかしたら烈狐丸クンはこの武蔵の土地に引かれたのか
もな。元々ここは靈力が強いことだし、妖怪の君が引かれるのも無
理はない話だ。それに…俺のチカラや、零の潜在能力にも引かれる

ものがあつたのかも知れないし」

なるほど~、と零は一人頷く。

「とりあえず、私とナオキとついでにこここの土地の力が強いからこの烈狐丸ちゃんがここに呼びよせられたわけね」

「零、今から今の発言の間違いを指摘するぞ。まず一つ目。烈狐丸クンが呼び寄せられたのはこここの土地の力とついでに俺とそのまたついでにお前の潜在能力だ。その次に…なんだその烈狐丸ちゃんという呼び方は！？」

あら、問題ある？と、先程とは打つて変わつて強気な姿勢の零にナオキはため息を吐く。そういうポジティブな姿勢は認めるが、あまりにもポジティブすぎるというのも問題だ。

「オイラは構わないっスけど…」

「ま、まあ、烈狐丸クンが言つなり…。で、話を戻すとだな、烈狐丸クン、君はこれからどうするつもりだい？」

「とりあえず、町に戻るつもりっす」

「そうか。零の詫びもある、昼飯くらい食べていってくれ。色々と話も聞きたいからな」

「いやいや、お構いなくっす！」

「いいじやないの、烈狐丸ちゃん！私もお話したいし…決定ね！」

零は烈狐丸を抱き締めながら嬉しそうに笑つた。ぬいぐるみのつもりだろうか、とナオキ、そして烈狐丸はお互い口を合わせると苦笑いを浮かべた。

「うわっ！ホントにフサフサしてるよー！」

先程から烈狐丸を抱き締めて離さない零は、よほど耳が気になるのか、優しく撫でていると思えば引っ張つたりと悪戯を繰り返している。

「ち、ちょっと…くすぐつたいっすよー！」

「だつて可愛いんだもん」

「ところで…ナオキさんはどこに行つたっすか？」

「ナオキ？多分キッチンで包丁振り回してるわよ」

「」の家はナオキさんが家事担当なんすか？」「

「まあ、大体ね。ナオキはウチの家政夫だから」

「家政婦っすか…」

ヒトは見掛けによらないっす…と烈狐丸は内心思つた。そんな事を進んでする感じには見えなかつた気がする。

「零さん…率直に聞くと、ナオキさんは何者っすか？」

「難しい質問ね。ん～あえて言えば、烈狐丸ちゃんと同じ…かもね」

「同じ…狐っすか？」

「ナオキは狐じゃないわよ！ナオキ自身がいうには昔は偉かつたんだつて。神つてまで呼ばれてたみたい」

「神…っすか」

まあ、私には関係ないけど、と零は烈狐丸の尻尾に軽くキスした。

「ああ、この尻尾！いいわあ～ 食べちゃいたい」

「止めんか！エセ乙女がつ…！」

「ちつ…邪魔が入つたわ」

大きなお盆を持ちながら客間に二人分の食事を持つてきたナオキを零は睨んだ。

「もうちょっとで烈狐丸ちゃんを私のモノに出来たものを…」

「まったく…一応烈狐丸くんは神に近い存在なんだけどな。遠慮はないのか！少しは敬つてみたらどうだ？」

「フツ…私が信じるのは『』の拳だけよ」

「…お盆でひつぱたくぞ」

「いやよ、案外痛いんだからソレ」

と言い合いながら手は料理を手際よく並べてゆく二人。

「こんなパスタで申し訳ない。お口にあればいいのだが」

「いやいや、とんでもないっす！いただきますっす」

と言いながら、烈狐丸は目の前の和風パスタを口に運ぶ。

「美味しいっす！こんな美味しいパスタ食べたの初めてっすよ！」

「烈狐丸ちゃん、こいつの料理にお世辞言つても良い事ないわよ」

「…嫌なら食べなくても良いんだが、零クンよ」

「…ありがたくいただきます」

といいながらおとなしくパスタを食べ始める零を尻目に、ナオキは烈狐丸に、そういえば…と話しかける。

「そういえば烈狐丸クン、キミは何故こんなとこでこんな格好をしているんだい？キミのような位の高い狐はそつそつ外には出れないだろ？」

「ああ、それはつすね…ある理由があるつす」

ある理由?とナオキは聞き返す。

「ある人の生まれ変わりを探しているつす」

「生まれかわり?それは大変だな」

「ナオキ、生まれ変わりって人よね?それって探せるもんなの?」

「正直、難しい。なんせ前世の記憶が無い人間が殆どだからな。零だって自分の前世の事なんて覚えてないだろ?」

「確かに…烈狐丸ちゃん、探す宛はあるの?」

零が心配そうに烈狐丸を見る。しかし烈狐丸の表情は明るい。

「大丈夫つすよ!必ず見つかるつて信じてるつすから」

「私も信じてるわよ。必ず烈狐丸ちゃんの大好きな人の生まれ変りとも会えるわよ!」

うん、会えるわ!と笑顔を浮かべる零。それに同調するように笑みを浮かべる烈狐丸とナオキ。本当は何の宛もない、根拠もない理屈だが、そんなことは関係なかつた。

「烈狐丸ちゃん、もうちょっとゆつくりしていけばいいのに~」

「いや、そろそろ行かないと彩にじやされるつすから」

そうか、と玄関先でナオキと零はお土産にナオキお手製のアップルパイを持たせた烈狐丸を見る。

「また、いつでも遊びにくるがいい。歓迎するぞ」

「また知らないうちにここに引かれた時は頼むつす。けど次はもう
ちょっとお手柔らかに出迎えてほしいつす」

「わかつてゐるわよ、今度は踏んすけたりしないからさ」

「頼むつすよ、零さん」

と、目を合わせて笑う一人。

「では行くつす」

「ああ。帰り道はここを真っ直ぐいけば町に出るからな
「わかつたつす」

またね」と零は武蔵家を後にする烈狐丸に手を振りながら見送ると
烈狐丸も手と尻尾を振り返す。

「…行つちやたね。烈狐丸ちゃん」

「ああ。…探している人物が見つかるといいな」

とナオキは小さくなつていく烈狐丸の背中を眺めながら、零に呟いた。

終

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6404b/>

~特別編~ある家族とゆかいな狐と

2010年11月28日06時54分発行